



第 142 号 (2010)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：森下弘 館長：ロン&バーブ・サイニィ

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.net/>

教室という枠を超えて

ウェンディ・ガイガー

2010年9月23日から10月5日までの間、私のキャリアの中で、最も貴重で心浮き立つ人生経験をした。ミズリー中央州立大学で、被爆者と通訳のグループを招待するにあたり身の引き締まる思いだった。私は、コミュニケーション学の教授であり、これまで、教室という枠を越えた教育経験を生徒にさせる事に全力を注いできた。それらの経験は「良い」、「かなり良い」、そして時に「とても良い」という評価だったと思う。しかし2週間にわたる今回の被爆者らとのプロジェクトほど学生や大学全体の耳目を集め、彼らに強いインパクトを与えたプロジェクトはかつて無かった。



1. 総数：プロジェクトタイトル「ノーモアヒロシマ：戦争体験と平和」。ミズリーでの滞在期間中全33回、1,600人以上の人達への被爆証言。「ノーモアヒロシマ：戦争の映像、平和の訴えの美術展」（被爆者の河野きよみさんが描いた絵とアメリカの画家で平和主義者のジェーン・バーンハードによる絵画、広島平和記念資料館からの電子データで送られた原爆展で使われる資料をスクリーンで展示）を見に約1500人が訪れた。大学のプログラムとして、この出席者数の多さはただただ驚くばかりだ。

2. 反響：プロジェクトへの驚異的な好反応。彼女らの滞在期間だけでなく、日本に戻ってからその反響が続いている。私は、幾度となくこのプロジェクトがとても有意義だっ

たとの感想を耳にした。生徒達は何度も感動のあまり涙を流し、クラスが終了しても自らの体験を語ってくれた被爆者に感謝の気持ちを表わしたくて並んで待っていた。教職員は、生徒達は被爆者が語った内容が説明出来るように、話し合ったり書き留めたりし続けていると教えてくれた。

3. 私への影響：WFCからの8人は考え方が前向きで、とても良い影響を受けた。大講堂でのプレゼンテーション終了後の祝賀会で、彼女達と身近に話す機会を持ち、私はより良い人間になれたと伝えた。皆から勇敢、誠実、寛容などの心を色々と学んだ。政治的に保守派が多く、大規模な軍が駐留し、ハリー・トルーマンが崇められているミズリー州に、被爆者が訪れる勇気に称賛の念を覚えた。話しを聞いた聴衆から批判的な反応があるのではないかと彼女たちが緊張していたのを、その期間の少なくとも半ばまで私は気がつかなかった。さらに、被爆者の通訳をしてくれた皆さんも勇気を発揮してくれた。被爆者の通訳者はプロではないので、被爆証言のメッセージを伝えられるだろうか心配していると話していた。毎回、通訳を通して語られる被爆証言には誠実さが感じられた。被爆者が潜り抜けたこの世の地獄、喪失感、惨状を語るのは生易しくは無い。しかしながら、何度も何度も誠意と気品を持って語ってくれた。プレゼンテーションの中で、何もかも誠実に話してくれたので、聴衆の心を捕え、感情に強く訴えかけたのだと確信している。そして、被爆者は許しの心を表してくれた。アメリカによって傷つけられた者がアメリカを責め、罪悪感を持たせる為にここに来たのでは無いと言われるとは思ってもよらなかった。しかし、彼女達はどのプレゼンテーションでも、聴衆とのやりとりや会話のなかで許しの心をみせてくれた。被爆者の活動から学んだ事、それは、報復と怒りは心を閉ざし、許しは心を開くという事だ。

ここにいる間、8人それぞれが心を開き、打ち解け分かち合った。被爆証言を聞くのはこれで終わりではなく、始まったばかりなのだ。これからも心を開いて話されるだろう。そして生徒達もノーモアヒロシマの話しを友人や家族に今後も伝えていく事だろう。

河野さん、笠岡さん、岡田さん、美智子さん、佐知子さん、伸子さん、尚美さん、そしてバーブさんに心から感謝しています。



ミズリーでの経験

バーク・サイニー

私達は人生において最も素晴らしいと思える経験をして帰ってきました。ほんの軽い気持ちでそう言っているわけではありません。この UCM (ミズリー中央州立大学) プロジェクトは私の記憶に永遠に残るであろうと心からそう思っています。それは内面的な洞察から始まり、人々を啓発するという理想と共に大きくなっていきました。私は受け入れてもらったこと、そして共有されたこの被爆証言に対する反応を目の当たりにして感謝の念でいっぱいです。



私達が最初に UCM へ招待されたとき、私は母国に帰って家族に会って楽しみ、懐かしい場所に帰ってくつろげると思っていました。この機会が日本の友達との関係をこんなに豊かにしてくれるとは思ってもいなかった事でした。岡田さん、河野さん、笠岡さんが彼女らの被爆証言を、クラスルームや合同のプレゼンテーションに必要とされる状況変化にうまく適合するような洗練されたものにしようと努力を重ねているのを見ているのは感動的なことでした。それは彼女らにとっては今までとは違う挑戦でもありました。通訳者の山根さん、森河さん、平岡さんが証言される方々の思いや気持ちを適切に述べるために適切な言葉や発音やフレーズを探して奮闘する場面がいくつもありました。彼女達の事前の準備や練習は、証言を悲しみや苦難だけではなく、希望の証言として伝えるための効果的なプレゼンテーションに寄与しました。私はさらに栗原さんがプレゼンテーションをより強固なものにするために、無限とも思える時間を費やして完全なパワーポイントのスライドショーを作る素晴らしい仕事をしていたのを見てきました。彼女は二ヶ国語のスケジュールの作成、旅行書類の作成、チームの快適な旅のための確認など休みなく働いてくれました。彼女の参加なしには準備はできなかったことでしょう。

私達がウォレンズバーグのミズリー中央州立大学に到着したとき、太平洋の向こう側でもまた準備がなされていたことを知りました。ガイガー教授によって30のクラスでのプレゼンテーション、3つの公の場所でのプレゼンテーション、そのほかに多くの特別なイベ

ントが準備されていました。心のこもった歓迎は素晴らしいものでした。大学の学生、教員、スタッフや友達から親愛なる歓迎の手が差し伸べられました。宿泊施設から乗り物の手配、食事や余暇の活動に至るまでの周到さは、被爆者の方々や WFC のチームの到着を心待ちにして何時間も費やした準備のあらわれに過ぎません。ガイガー教授は被爆者の証言の紹介も準備していました。それは力強いものでした。それは簡潔な言葉で第二次大戦の事実とこの戦争の悲劇的な終結を表現していました。最後の締めくくりは私が経験した中でも最も専門的であり深い感動を覚えるプレゼンテーションそのものでした。

アメリカ人の視点から見て、私は聞く人の表情から気持ちが読み取れました。最初のプレゼンテーションの間、私はクラスの中で見守っていました。最初は大学のクラスに出席するという義務の気持ちが見られただけで、それ以上のものではありませんでした。やがて関心が見え、それは心を揺さぶられるショックとなり、そのショックは恐れとなり、その恐れは問いかけへと導かれていったのです。同じようなことが、時間が経つにつれて繰り返されました。このプロジェクトの勢いは、それぞれのクラスにおいても広がっていきました。学生たちは他の学生たちと話を始め、学部の教員達はプレゼンテーションが計画されているクラスとジョイントすることを計画しました。プレゼンテーションに兄弟姉妹や友達に参加できるかと問い合わせる人もおり、父兄は子供も一緒に9月30日の夕刻のパブリック・プレゼンテーションに参加できるかと尋ねました。合計で2000人以上がこの講演を聞きました。驚きの他はありません。

問題意識を持つということは、教育におけるゴールであり手段ではありません。人類を抹殺することのできる戦争や兵器の無益さを世界中の人々に知ってもらいたいと望んでいる私達は、若い世代の人たちのことを忘れてはならないことを知っています。彼らにとってこのような歴史の側面やこのような証言は初めて聞くものだということを忘れてはいけません。アメリカの子供たちはいつも戦争というものを傍観者の立場で見る世界に住んでいるのです。戦争は映画であり、インターネットの物語であり、夜の30秒のニュースにすぎません。変化を期待する私達は、被爆者の方々がこの65年間続けてこられたように、“ノーモアヒロシマ”を継続し、言い続けることが必要なのです。



特別な感謝を込めて

バーブ・サイニー

WFC に代わりケント&サラ・スウィツァー夫妻に心からの感謝の気持ちを述べたいと思います。ミズリー中央州立大学、トルーマンライブラリー、ウォーレンズバーグのブレザレン教会で、お二人は専門知識や協力を惜しみなく与えてくださりそれは本当に欠くべからざるものでした。ケントの専門的な写真とビデオ技術のお陰で、これから何年も記録が残るでしょう。



サラの温かい思いやりと穏やかさは、多忙な日々の中で、皆の気持ちを爽やかにしてくれました。それは無くてはならないものでした。有難うございました。心より感謝しています。

ウォーレンズバーグのブレザレン教会にも心からの感謝を述べたいと思います。その温かい思いやりと歓迎は心に残り、教会のホスピタリティーの模範となるものでした。話す機会を与えて頂き、フェローシップランチをふるまってくくださったことにお礼を述べたいと思います。

アメリカでの被爆証言を終えて

河野 きよみ

2010年9月22日から10月6日まで、ワールドフレンドシップセンターからの派遣で、セントラルミズーリ州立大学での被爆証言活動に参加させていただきました。

本企画はドクター・ウエンディ・ガイガー氏の立案によるもので、彼女の奔走により容易に実現できないことが



可能になったものと、奇跡のように思っています。滞在中はウエンディ及びバーブ・サイニー館長のお二人に献身的なお世話をさせていただきました。また前館長ケント氏には画像など視覚的準備をしていただき、同夫人にも米滞在中に細やかなお世話をいただきました。私は初めての海外での証言を受け入れてもらえるかと不安を抱いて出発しましたが、こういった皆様方の温かいご支援で、証言活動ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、今回の証言活動を通して印象的だったのは、行く先々で話しやすい環境を整えて下さったことです。例えば、廊下の掲示板、食堂のメニュー表等、あらゆる場所に証言者3人の写真や絵入りのポスターが掲示してありました。また証言への導入として、ウエンディが第二次世界大戦の概要から原爆投下までの経緯を的確に説明して下さいたので、スムーズに証言に入ることができました。おかげで学生たちは真面目な態度で熱心に証言を聞いてくれました。話が終わると、そばに来て「知らなかった。ごめんなさい」「お話を聞いて私の人生が変わりました」「家に帰ったら必ず両親に伝えます」等々、涙ながらに話してくれたり、頬に度々キスをしてくれたり、手を合わせてくれる学生もいました。たくさん女の子の涙を見ましたが、男子学生も「サンキュー、サンキュー」といいながら力強くハグしてくれました。なんと純真な人達なのだろうと戸惑うほどでした。一人でもよい、話を通じてくれたらと願っていた私は、こういった青年達に人類の明るい未来を感じました。毎回話を聞きにきてくれる学生の姿もあり、本当にうれしかったです。証言活動に慣れない私たち親子は上手くは話せません。でも毎朝、娘と「上手に話せなくても心をこめてお話をしようね。きっと何か通じると思うよ」と誓い合って証言に出かけました。今回、心は伝わるのだと実感しました。

歴史の重みを感じさせる壮大なヘン德里ックホールで証言中、私の絵本が画像で流れました。私は絵の中の人物に向かって心の中でつぶやきました。「文子ちゃん、とうとうあなたのことをアメリカの人たちにお話しましたよ」その時に友の顔が笑ったように見えました。同様に広島二中の少年たちの遺影に「わずか14歳で虫けらのように死んでいったあなたたちの無念の魂が、私をここまで連れてきたのですね」と呼びかけました。「僕らのことを伝えて」という夢での約束も果たせたような気がしています。証言が終わると会場の全員が立ち上がり、長い間拍手が鳴り止みませんでした。その時のプレゼンテーションの様子は、インターネットを通じて全世界に流されました。大変感動的な出来事でした。

滞在中は様々な交流が用意されていて、日本人留学生達と楽しいひと時を過ごしました。

1万1千人の学生の中で、日本からの学生は20人余りだと聞きました。彼らとは日本語で話せたので、ほっとしました。日本を遠く離れ、勉学に励む若者達を頼もしく思いました。それぞれの志望が叶うように祈っています。

ブレザイン教会では礼拝や賛美歌の経験をしました。アオギリについて山根さんがすばらしいスピーチをされ、笠岡さんの堂々とした証言があり、『アオギリの木の下で』の合唱をしました。皆様が好意的で、美味しいケーキや果物をご馳走になり、心豊かにすごせた一日でした。

期間中は過密なスケジュールでしたが、証言活動の合間にウエンディは貴重な観光や体験もさせてくれました。

東洋の美術品を収集しているカンザスの美術館では、莫高窟から掘り出された仏像の多さに驚きました。美しい仏像に度々手を合わせました。廻廊にはヘンリー・ムーアの作品が数多く置かれていました。特にウエンディお気に入り『リクライニング』というヒューマンな作品で、見る人にムーアがたくさん問いかけをしているようでした。

原住民の生活用具の文様にも感動しました。なんとなくアイヌの文様に似通っている気がして、滅ぼされた民族の哀しみを感じました。英文の説明が読めないのがとても悔しかったです。

映画『大草原の小さな家』を彷彿とさせるような場所にも行きました。カントリーソングを聞きながらの夕食会も経験しました。特に、同僚の先生宅に招待され、アメリカの知識層の生活をかい間見たのは夢のような出来事でした。まるで洋画の世界に浸っているようで、招いてくださったご夫妻の懸命なお姿に、人をもてなす温かいマナーを学ばせていただきました。

セントルイスでは、西部開拓の歴史的なシンボルであるゲートウェイ・アーチを見学し、『トムソーヤの冒険』の舞台となったミシシッピー川の川風に吹かれ感激しました。

ウエンディさんには、講義の合間に食事の手配、送迎、長距離運転もしていただき、大変なご苦勞をおかけしたものと深く感謝しています。

10月に入り、朝晩少し肌寒くなって来た時に訪れたトルーマン・ライブラリーでの体験は忘れることは出来ません。丘陵地に低い簡潔な建物が建ち、周りに何も無い所なので非常に寂しく感じられます。辺りは静けさに包まれています。廻廊には、大統領時代に会見されたエリザベス女王はじめ世界の著名人の写真が掲げられ、中央に盛装の



トルーマンの像が立っていました。その像を複雑な気持ちで仰ぎました。ガラス越しに庭園が見えます。庭園には、夫人とお嬢さんと三人がベコニヤの花に囲まれて眠っておられます。在郷軍人が献火されたという灯火が燃えています。館長さんは背の高い伶俐そうな方で、笠岡さんの証言が終わるとさっと部屋を出ていかれました。そして、私の証言が終わるとまた現われて、館内を案内されました。地下では第2次世界大戦のビデオが上映され、日本軍の敗退する様子が常に流されていました。大統領執務室も再現されていましたが、案外質素でした。晩年を過ごした居室も然りでした。

私は過去の戦争について、恩讐の彼方にとか、歳月は何事も水に流すとかいう言葉が胸中を過ぎりましたが、「核廃絶と世界平和を願います」としっかり記帳して来ました。その時、体が震えるようでした。しかし、ウエンディのお陰でこんな歴史的に貴重な場所で証言できたことを大変意義深く思っています。

最後に、この度の証言活動は館長夫妻とウエンディがいてくださったお陰で実現したことでした。ウエンディに2週間接し、その大きな人間性に触れ、毎日感動の連続でした。凄い人に出会えたことを神の恩寵のように感じます。

また今回、最初から最後まで、黙々と準備万端整えて下さいました栗原様に心からお礼を申し上げます。中心的存在の山根様、常に優しく接して下さいました平岡様、さらにご一緒いたしました証言者のお二人にもいろいろお世話になり、ありがとうございました。

帰国後、ようやく旅の疲れがとれた頃に、またもやアメリカの臨界前核実験が報道されました。全身に冷水を浴びた気持ちです。しかし、証言が無駄だったと思っははいけないと思います。ヒロシマが黙ってしまっは、誰が語ってくれるでしょう。今こそ言葉の力を信じて、一人一人がヒロシマのことを伝えるべきだと思います。

この度、次女と共にアメリカで証言ができたことをうれしく思います。今後は彼女なりに私の意志を受け継いでくれることを願っています。



UCMでの被爆証言

笠岡 貞江

姪からアメリカで証言してもらえないか、と聞いていました。5月に館長さんから説明があり時間的に制限があるので証言が短くなると知り、それで伝わるのかと心配しました。時間に合うような原稿を作り、持参した写真でパワーポ

イントも作ってもらいました。

7月にウェンディさんが来日されセントラルミズリー州立大学での証言活動の内容が少しずつ分かってきました。大学の大きな事業だと知り、「大変なことだ。私で大丈夫だろうか?」と心配でしたが恐いもの知らずで、「お役にたてるなら」と引き受けました。しかし、出発日が近づくにつれ不安になりました。

アメリカに着いた翌日（9月23日）キャンパス内を案内してもらいました。広大な敷地に大きな木々、日本でも見かけるような草花、りっぱな校舎が立ち並び、まるでひとつの街のようでした。建物の内外で学生たちが行き交い、そのおだやかな光景で、張りつめていた緊張がほぐれた感じがしました。

9月24日（金）第1回目のプレゼンです。ウッドビルディング205号室、9時30分から10時30分まで。始めにウェンディさんが戦争の背景、原爆投下などの説明をされ、その後、河野さん、私の順で証言しました。30人余りの学生さんは、短時間にまとめた証言でしたが熱心に聞いてくださいました。

9月26日10時にウォレンズバーグブレザレン教会のミサに参列しました。礼拝が終わって、私たちを紹介してくださり、アオギリの紹介とアオギリの歌に続き、岡田、笠岡、河野の順に証言しました。うなずいたり、目頭を押さえたり、自分のことのように聞いてくださり質問もありました。また、別室では食事が用意されていて心温まる昼食会でした。また、夕食はウェンディさんのお友達の家に参加して、アメリカの家庭の雰囲気を感じることができました。

27日には3回、28日は学内で1回行い、昼食後自動車でオーバーランドパーク市に移動し、地元の高校で証言しました。時間が限られていたため証言者は笠岡一人でした。美智子さんがアオギリの種について説明し、みんなでアオギリの歌を歌いました。学校内のスタジオで小さいけれど舞台の上、暗い中、照明の光を受け、緊張して途中で話を飛ばしてあわてたけれど、最後はどうかまとめました。高校生は知ろうとする意欲があるように思われました。アオギリについても証言も食い入るように聞いてくれました。

29日は2回。30日の会場は大学のホールでした。壇上にはアメリカ、日本、UCM大学のフラッグが掲げられ、心からの歓迎を感じてうれしく思いました。600人の学生、教授の方にステージ上から岡田、笠岡、河野の順で証言をしました。世界中から核が無くなること、また2度と核兵器を使用してはならないという私たちの願いを、皆さんが受け止め共感してくださったと思いました。ホールでの証言の前に新聞社の取材を受け、翌日の紙面に掲

載されびっくりでした。また、アフガニスタンから帰還した女性兵士の写真展示を見ました。英語は読めませんがその顔写真は何か語りたい奥に秘めたものが感じられました。

10月1日は2回証言しました。そのあと学内のテレビ局から取材がありました。10月2日はトルーマンライブラリーでの証言。館長さんが館内を案内してくださいましたが、展示は全部英文で日本降伏のみが日本語。見るのもむなしかったです。世界大戦が終わりに近づいた時、この人が原爆投下の決断をしなければ私たちの悲しみはなかったのにと悔しい思い。眠っているという墓石のそばに半旗のアメリカ国旗、永遠に英雄、仕方のないことかと思いました。館内には多数の入場者がみられました。

質問は総じてアメリカに証言しに来たのはなぜか、アメリカに来てどう思ったか、つらいのにどうして証言をするようになったのか、兄や弟は元気かなど家族のこと、なぜ差別があったのか、今も差別があるのか、日本の子供はどのように原爆、その後障害を学習しているか、などでした。多くの方は戦争を終わらせるための手段であったと理解していて、はなしを聞いて原爆の脅威、悲惨な状況を理解され、「アメリカがしたことをごめんなさい」と涙ながら謝ってくださる人も多くありました。被害者の立場からの主張だけではなく、核の悪を知らない人に理解してもらうために悲しくても、つらくても伝えることが大事なことを再認識し、核兵器が世界中から亡くなるように、これからも、機会があれば証言をしていくつもりです。

アメリカは土地も広いけれど心も広く、皆さんが暖かく迎えてくださり毎日を新鮮に過ごすことができました。貴重な体験もできました。多くの方々のご好意、ご支援をいただき本当にありがとうございました。

I love UCM. I love Missouri. I love WFC.

岡田 恵美子

蒸し暑い猛暑の広島から秋晴れのさわやかなカンザスシティ国際空港に到着しました。大型車でウエンディさんが出迎えて下さり、コーン畑や、牧草の中牛、馬、羊が遊牧するのを目にしながら走りました。ヒロシマを知ってもらうミッションのスタートです。

大勢の大学生たちに被爆証言を聞いてもらいました。専攻も様々で、メディア読術、ライ

ディング、ソーシャルワーク、軍事の歴史、コミュニケーション、反核社会運動など。航空学科でパイロット、整備、経営などを学ぶ日本からの留学生等とは対話も出来ました。



昔インディアンが居住していたその場所に建てられたという高校も訪れました。その高校生らも含め約1,700人が真剣に耳を傾けてくれ

ました。その間受けた質問と私の答えを書いてみますと、

Q 家族は今どうしているか？

A 姉は原爆の火の中に消えたまま。両親は被爆後を困難辛苦の中に生き既に彼岸の人。二人の弟は県外で生活しており、末弟は墓参りに帰省しても原爆資料館には近づこうとしない。

Q 終戦後、支援があったのか？

A ララ物資（衣類、食品等）が広島駅近くの教会に送られてきた。ジュノー博士の尽力による医薬品。原爆乙女がニューヨークの病院にて手術、治療を受けた。精神養子縁組、里親など。

Q 差別があったか？

A 仕事が少ない。結婚話が破綻。

Q アメリカにどうして欲しいか？

A 広島長崎を知ってもらい、現在23,000もあるといわれる核兵器の廃絶を願う。平和市長会議へ加盟してほしい。

ウオレンズバーグ・ブレザレン教会の礼拝に参加し、大学内の一室で折りヅルを折りながら大勢の人たちに佐々木禎子さんの話をしました。ダウン症の生徒さんも折ってくれました。バーブとサラの協力も得ての長机いっぱいの折りヅルに、平和のメッセージを皆さんに書いてもらいました。

トルーマンライブラリーを訪れた折には様々な感慨に浸りました。先ず驚のモニュメントが目に入り、両側にエリザベス女王、スターリン、野球選手とトルーマン大統領会見の写真などが並ぶ通路を経てガラス張りの地味な部屋へ。以前は日本地図が掛っていたと聞くその部屋は、T字型の相生橋を目標に原爆投下のゴーサインが出された執務室なのかも、と思いました。次のホールは、バーバラ・レイノルズの努力で世界平和巡礼中の被爆者とトルーマン大統領の会見が実現した場所です。彼女の信念に満ちた行動力には感謝の言葉もありません。アフガニスタンからの帰還兵の写真展では一つの笑顔も見えないのが気になりました。

勇敢な平和活動家たちにも会いました。軍需産業の核の部品製造工場から平和産業への転



換を訴える行動を起こしているグループでした。若いアンさんはニコニコ笑いながら「今までも何度も警察の世話になったの、又近々つかまりに行きます」と話してくれました。

トルーマンライブラリーのあ
るミズリー州は、基地があり軍
需工場がある保守的な州だか
らか、平和市長会議への加盟が
ないのが残念です。

ウエンディさん始め、UCMの多くの関係者の皆さま、ケント、サラ、バーブ、WFCで留守を守ってくださった友人家族、多くの皆さんのお陰で楽しく充実した2週間でした。心から感謝とお礼を申し上げます。有難うございました。

2010 年秋

ワールドフレンドシップセ

ンターの皆さま

ラリー&ジョアン・シムズ



秋の涼しさ爽やかさは、広島長崎の 8 月のあの暑さを思えば格段の違いです。

季節や気温が変化するように人の記憶も変わっていくと思われるかもしれません。私たちが WFC を訪れたときの記憶は暖かく思いやりに満ちています。色々な面で本当にお世話になりました。食事、ガイド、被爆者の話、フレンドシップの再確認はもとより、多くの新しい友人にもめぐり会いました。とても有り難く心から感謝申し上げます。季節や気温がどう移り変わろうとも、私たちの 2010 アメリカ PAX の記憶は、どこまでも暖かく思いやりに満ち、平和を愛するものです。

日本でのあの日々の熱気と衝撃のおかげで、新たな情熱が私たちの中に湧き起こってきました。

1. 出来る限りの多くの人に被爆者の話を伝えねばならない 2. 核兵器廃絶の為、我々に出来る事は全てやらなくてはならない 3. 全世界に平和を推進していく事に私たちのエネルギーを集中させなければならない。

私たちのこの 3 つの任務の遂行は、たくさんの集会を実現させる努力を通して今、形になりつつあります。シアトル大学、ワシントン州立大学、ジョージ・フォックス大学、リンフィールドカレッジ・・・それらの政治学部、宗教学部、及びピースセンター、リーダーシップセンター、同窓会などとコンタクトをとる為のアポイントメントを取ろうとしています。

まず最初にコンタクトを取ったのが、ヤムヒル ピースメーカーズとインターフェイスピース ウィズ ジャスティス グループです。私たちの経験したことや責務をこの国の皆と共有するため、その方法を探り、イベントの場を追求していくつもりです。

インターナショナル リーダーシップ アソシエーションが、2011年4月のシアトル平和会議リーダーシップにむけて、提案の公募を12月に発表しようとしています。私たちは応募して案を出すことにしています。

シアトル ファースト バプティスト チャーチ、ユニバーシティ バプティスト チャーチ イン シアトル、そして ファースト バプティスト チャーチ イン マクミンビル・・・これらの教会で行うプログラムや経験を共有するためのプレゼンテーションの準備を今進めています。さらに、ピースコンサート又はピース ウィークエンドといったものをシアトルとマクミンビルの両方でやることも考えているところです。

メディアとのコンタクトはこれまでのところ、日時は未定ですが年内（2010）にパブリック テレビジョンに出演することになっているのと、映画「ヒバクシャ・未来の命へ」を出来るだけ多くの場、機会に上映すべく図る責任を引き受けていること。広島・長崎被爆65周年の記録の編集に余念のないフィルムメーカーのパトリック・マーフィーとは引き続きコンタクトをとっています。

最後に、PAX2010でのWFC訪問のおかげで、平和のために、核兵器なき世界へ向けて働くために、そして被爆者の体験を出来るだけ多くの人に知らせる為にPAX、平和大使とのご縁を今後も継続していこうとの決意を新たにしました。稀有な機会を、本当にありがとうございました。

希望は持ち続けましょう。



PAXとして日本を

訪れて

ブラッド・ヨダー

広島駅に到着すると、すぐにWFCのスタッフや理事の皆さんの暖かい出迎えを受け、WFCに直行しました。すでに、他のPAXメンバーは集まっていて、自己紹介や今までの平和活動等を報

告していました。私は、レイチェル・ケントの後で発表しました。

私たちは、山根美智子さん、平末洋子さん、上別府静子さんたちに平和記念公園を案内していただき、公園内の16の記念碑を訪れました。

午後は RERF(放影研)に行きました。この施設は広島と長崎（最近は チェルノブイル、ロシア、その他の核被害の場所）の被爆者の放射能の影響調査をしていました。米国政府がこの施設を管理していた最初の数年間は、ただ調査だけで被爆者の治療はしませんでした。1957年に原爆医療法が制定されてから、日本政府と米国政府が共同で管理をするようになり調査や治療を行うようになりました。

8月6日・この日が追悼記念日であることは全員が予知していました。記念式典に参加して とても感動し、歓迎されました。65年前に起こった壊滅状態を思い出すのは悲しい事ですが広島に来て式典に参加できてとても光栄でした。パン・ギムン国連事務総長が式典に出席した事に多くの人々がとても感謝しました。彼は韓国出身で日本と関係があることから とても感動的なスピーチをしました。管総理大臣は日本の韓国侵攻と占領に対して韓国人に公式に謝罪しました。この事は韓国の人々にとって意義深いことでした。ジョン・ルース米国駐日大使が65年後始めて出席した事に大いに感謝しました。

長崎での経験

私たちは 岡まさはる記念長崎平和資料館へ行きました。そこでは日本が1920～1930年代にどのように軍国化して中国や韓国に侵攻したかについての歴史がわかります。そのほか数箇所を巡り、その夜はカトリック センターに泊まりま



した。そこで アメリカかロシアに1年かそれ以上滞在予定のNAC (Never Again Campaign) のボランティアたちに会いました。とても独創的なグループで地球から核兵器を廃絶するために活動している若者たちです。彼らに会ってとても刺激を受けファイトが沸きました。8月9日・65回目の記念式典は広島の様と同様に感動的なものでした。空は雨が降りそうで重い雲が垂れ込めていました。式典が始まる前に NHK テレビ局のインタビューを受けました。広島と長崎の人々のすばらしい歓待に感謝している事と、65年前に米国政府

が日本の人々に対して核兵器を使用するに至ったことを残念に思うと答えました。その夜は 長崎バプテスト教会の信徒の皆さんと夕食をともにして 食事も彼らとの親交も とてもすばらしいものでした。そして、ステイブ・リーパーの対立を解決するために暴力を使う戦争の文化とすべての仲間の強さを話しあって主張する平和の文化とを対比したメッセージにも感動しました。彼は、永井隆博士を追悼して 博士は原爆による白血病で亡くなったが 人々を治療するために彼の持てるすべての知識と技術を使い、そして放射能の影響を研究調査したことを話しました。

日本滞在中に私たちが共にすごして体験した時に受けた強く、暖かく、優しく愛情に満ちた歓待に対して少々の言葉では感謝の気持ちを表現できません。空港や駅まで出迎えていただき、私たちの活動中一緒に行動して、施設を案内し、プログラムをこなし、65年前の被爆証言の苦しみを共有し、彼らの家庭に招かれた事などは皆様の友情と寛大さに満ちていました。ただ“ありがとう”だけでは感謝の気持ちは言い尽くせませんが、これが始まりです。私達が体験した事を機会あるごとに人々と語り合い、バーバラ・レイノルズのビジョンをずっと心に留め置き、日本やアメリカ以外の人々とも活動していきたいとおも



います。核兵器を二度と使ってはならない事そして、地球上から核を撤廃するように活動が続けたいと思います。

ワールド・フレンドシップ・センターでの活動を通して

広島修道大学 法学部 国際政治学科

山本 健太郎



私たちのインターンシップは8月31日から始まり、毎週火曜日から土曜日の朝早くから夕方4時頃まで実習を行いました。初日はゲストとしてワールド・フレンドシップ・センターに宿泊し、実際にゲストの気持ちを体験することが出来ました。そして次の日から私たちのインターンシップが本格的に始まりました。毎日行う作業は、その日に来られるゲストのためのベッドメイキング、また宿泊していたゲストへの朝食の提供や、使ったシーツやお皿や部屋の掃除などの宿泊施設の作業でした。ゲ

ストへの朝食の提供は朝8時から行われるため、私たちは毎朝15分前の7時45分までにワールド・フレンドシップ・センターに行かなければなりません。毎朝大学の1限目よりも早く起床しなければならなかったのも、とても大変だったのですが、1回も遅刻や欠席をすることなくワールド・フレンドシップ・センターに行くことができました。今思い返すと、それだけワールド・フレンドシップ・センターでの実習が楽しかったということです。またそのおかげで早起きという良い習慣を身につけることができました。

もちろん最初は何をしたらいいのか、何から始めたらいいのか分かりませんでした。しかし館長のロン・バーク夫妻が私たちに一から丁寧に教えてくださり、彼らのおかげで落ち着いて楽しく実習を行うことが出来ました。またロン・バーク夫妻やワールド・フレンドシップ・センターに来られるゲスト達とは英語で会話をしなければならなかったため、私たちの英語で通じるのかどうか大変不安でした。最初はためらっていましたが、すべてのゲストたちはとても温かく私たちを迎え入れてくれ、彼らとの会話でたくさんの大切なことを学びました。何人かのゲストとは、今でもEメールで連絡を取っています。

宿泊施設の作業以外にも、ロン・バーク夫妻が開講している英会話クラスに参加して英語でディスカッションを行ったり、平和資料館に赴いて被爆者の話を英語で、平和公園内をワールド・フレンドシップ・センターのボランティアスタッフに英語で案内してもらったりなど、普通の大学生活では出来ない貴重な体験をすることが出来ました。

私がこのワールド・フレンドシップ・センターでのインターンシップ活動で学んだことは、ワールド・フレンドシップ・センターは様々な活動を通して世界平和を訴えているという

事です。先ほど述べたように、ワールド・フレンドシップ・センターは宿泊施設、英会話クラス、ピースボランティアなどなどの様々な活動を行っています。しかしそれらは、ホテルや旅館などの、ただ宿泊するだけの施設ではありません。大学の講義やAEONなどの英会話学校のような英会話クラスではありません。もし広島でただ宿を探している人がいたら、私はワールド・フレンドシップ・センターよりも安く泊まれるビジネスホテルやユースホステルを紹介します。もしただ英語を勉強したいという人がいれば、私は大学の講義やAEONなどの英会話学校を薦めます。しかしもし、英語を通して広島歴史のことも原子爆弾のことを勉強し、世界平和について学びたいという人がいれば、私はワールド・フレンドシップ・センターを薦め、ぜひとも宿泊して平和について考えてもらいたいと思います。ワールド・フレンドシップ・センターはそういう場所であると思います。ワールド・フレンドシップ・センターには国を問わず、世界中からたくさんのゲストが集まってきました。居間の世界地図が示しているように、色々な国から来られます。しかし皆平和について学ぼうとする姿勢がとても熱心であり、「平和記念公園や資料館でたくさん平和について学ぶことが出来たよ。もっともっと自分たちに何が出来るのか考えさせられた」と言ってくださいます。このようにして多くの活動を通して人々が平和について学ぶことが出来ているのは、ロン・バーブ夫妻、日本人ボランティアスタッフ全員がバーバラ・レイノルズの平和への願い、希望の意思を受け継いでいるからだと思います。彼らはいつでもどんな時でも、戦争がもたらした過ちを二度と繰り返さないように訴えているのです。私はインターンシップを通じてこの貴重なことを学ぶことが出来ました。

また私は非常に感動した言葉をワールド・フレンドシップ・センターの玄関で見つけることが出来ました。それは「平和はここから、あなたから」という言葉です。これはワールド・フレンドシップ・センターから、日本中、そして世界中の人々に向けられた言葉です。現在、高齢化の影響で年々被爆者の数や戦争を経験した人々の数が少なくなってきており、戦争の悲惨さ、恐ろしさを後世に伝える人がいなくなってきています。広島に住んでいるが、原爆のことをよく知らない人、日本に住んでいるが戦争のことをあたかもたかが過去の歴史の1ページであると思っている人が増えていることも現実です。言葉を変えれば、我々は戦争のことを歴史の教科書の1部でしか知ることが出来ないのです。しかし、私たちが過去に犯した過ちのことを深く認識し、自分自身で平和についてもっともっと深く考えるようになれば、今自分たちが平和な世界にするために何をすればいいか分かるはずで、この言葉が語るように、まずは自分自身が平和についてよく理解する姿勢が最も重要なことであり、私自身もそうでありたいと願っています。そして私たち若い世代がそうであり、戦争のない世界、平和な未来にしていきたいと願っています。

「平和はここから、あなたから」

インターンシップ

津島 奨志

私は8月31日から9月13日までの2週間、WFCにインターンシップとして行かせていただきました。修道大学の人文学部のプログラムとして組まれて



おり、正直言うと、最初からWFCに行きたいということはありませんでした。国際交流センターも募集しており、そこへ行こうと思っていました。なので、インターンシップ中にたまに日本人スタッフの方から「どういった理由でここへ？」と尋ねられることもあり、そのたびに困惑していました。しかし、WFCで働くことで勉強させてもらうことが多々あり、非常に貴重な経験ができました。

主な仕事内容は、ゲストへの朝食の準備、次のゲストへの部屋の準備、部屋の掃除、シーツ、タオルの洗濯など宿泊としての仕事は勿論のこと、英会話クラスの参加や幼稚園での発表会など宿泊以外の仕事も経験させていただきました。特に、印象的だったのは暁の星幼稚園での発表会です。当初は、人形劇の手伝いだったのですが、急遽、司会という大役をもらいました。当然、お互い司会の経験はほとんど皆無に等しいにも関わらず、ピンマイクを付け替えるまで話をつなぐという高い(?)技術を要求されたりしました。これについては、緊張しすぎていたのでどうい話をしたのか今でもあまり覚えていません。



WFCという場所は、上司部下という縦のつながりより横のつながりを大切にする場所であるということを今回のインターンシップで理解することができました。国籍、性別、年齢という枠を超えた人と人との関係でWFCは成り立っているということを一番勉強させていただきました。また、本来は私たちが昼食を用意する予定でしたが、インターンシップ全日程にわたって昼食を作ってくださり、本当にありがとうございました。これからもWFCにお世話になることもあると思いますが、そのときは津島奨志をかわいがってやってもらえたらと思っています。

NARPIパイロットプロジェクト 平和構築トレーニングのためのワークショップ報告

2010年10月23日

立花 志瑞雄

8月20日から24日まで、アステールプラザを主会場にして、「NARPIパイロットプロジェクト 平和構築トレーニングのためのワークショップ」が開かれました。そもそもNARPIとは？ NARPIは、東北アジア地域平和構築インスティテュートの英語 Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute の頭文字をとった呼び名。

このNARPIとワールドフレンドシップセンターの関わりを振り返ってみます。昨年、韓国PAXでセンターと関係の深いKAC（韓国アナバプティストセンター）のイ・ジェヨンが来日、広島を含む数か所で、NARPIの構想について分かち合い、参加を呼びかけました。広島ではセンターの理事会で、NARPIの構想を聞く機会をもち、イ・ジェヨンを講師に紛争解決、平和教育などをテーマに三日間にわたりワークショップをもちました。その後、センターの活動の一つとして、NARPIに関わっていくことになりました。そして、センター活動としてできることとして、当時、広島在住でセンターに関わりをもっていたクリシュナ（モーリシャス）を講師として、約半年間にわたり、定期的にワークショップを開きました。

さて、NARPIは日本国内だけの活動ではないことはこれまでの紹介で、ご理解いただけたと思います。私たちの住む東北アジア地域は政治的、軍事的に不安定な地域であることは、日頃から感じることです。私の言葉で説明させていただくとNARPIの働きは、この地域において、草の根のレベルで、平和を作り出す働きを担おう、特に理論だけではなく、小さなレベルから大きなレベルまで、紛争や衝突を防いだり、解決したりするスキルを学び、平和な北東アジアをつくるために、寄与していこうということではないかと思っています。

このNARPIは現在、準備段階にあります。特徴のひとつとしてネットワークの要素をもっていると私は思います。日本においてはいくつかのグループ、個人がNARPIに関わりをもち、韓国、中国、台湾、インド、モンゴル、ロシア、アメリカなどのメンバーと共に、実現に向けての話し合いが続いています。直近では10月25日からピースボートの船上で第2回目の運営のための話し合いが行われることになっています。

ここまでお読みになってまだNARPIは何をしようとしているのか、はっきりしないという方もおられるかもしれませんね。それに8月のパイロットプロジェクトの報告はどう

なったのと思われる方もいるでしょう。NARPIの活動の柱は平和づくりのための講座、ワークショップを各地域、毎年持ち回りで開催していくことです。2011年8月に韓国で第1回目の講座がもたれようとしています。詳細が決まりましたら広報しますので、ぜひ、参加して、平和づくりの担い手として、ご活躍いただければと思います。

さて、来年の講座スタートを前に、広島で開かれたのが「NARPIパイロットプロジェクト 平和構築トレーニングのためのワークショップ」です。このプロジェクトに関わるようになったのは、NARPIの日本ネットワークの一員である平和的手段による紛争転換 トランセンド研究会の奥本京子さんが、センターを訪問されたのがきっかけでした。企画運営をトランセン研究会が行い、他のネットワークのメンバーが協力し、センターも開催場所という地の利を生かし協力にあたりました。NARPIのパイロットプロジェクトとしても位置付けられました。トランセンドの主催者であるヨハン・ガルトゥング博士が、広島大学で開かれる教育学会で講演されるのを機に、博士の参加も得て、ワークショップは実現しました。協力にあたったセンターでは、準備のために何回か会合をもちました。期間中も英語クラスやセンターの活動に関わってくださっているメンバー、修道大学のインターン生、元インターン生、理事の方たちのご協力をいただき、微力ながら今回のワークショップを支えることが出来ました。ありがとうございました（紙面の都合上、お名前を割愛させていただきますことお許してください）。

「平和構築」言葉としては理解できますが、私たちが普段使う「平和教育」という言葉に比べるとまだまだ馴染み薄い言葉ではないでしょうか。全日程の参加ではありませんでしたが、ワークショップに参加してみて、平和づくりのためのスキルの一端を体験できたように思います。いくら行動してもそこに思いがなければというお言葉もあるかもしれませんが、でも、心配ご無用。今回のワークショップで一番印象的で、新鮮だったのは、その思いの部分だと私は感じました。ガルトゥング博士が話された「夢」の大切さ。平和の「夢」をもつこと。そこから、平和づくりの一步ははじまります。

こども達に感謝——暁の星幼稚園フリーデー

池田 美穂



去る 9 月の水曜日、暁の星幼稚園のフリーデーにセンターから大勢で参加させていただきました。1 時間という長い枠でしたので、バーブ館長による英語の歌や朝香先生・ピースクワイアの皆さんによる日本語の歌、それから、シンちゃんの腹話術、指人形劇（ロン館長のオオカミは圧巻でした）など、盛り沢山のプログラムを用意いたしました。

200 名余の子どもたちを前に、皆少し緊張しておりましたが、修道大学のインターン生のお二人による名司会のおかげで、ぐ〜んと柔らかな雰囲気になりました。前日に急きょお願いしたにもかかわらず、快く司会を引受けていただいたので本当に感謝しています。

フリーディを終えて私たちが一様に感じたことは、子どもたちの元気いっぱいの歌声やあふれる笑顔が何て素晴らしいかということでした。私たちが歌うと子どもたちも歌ってくれて、反応してくれて、笑ってくれて、驚いてくれて、拍手をしてくれて、私たちの方が最高に楽しくなりました。園児の皆さんから私たちに、たくさんの元気とからだいっぱいの幸せをプレゼントしてもらった一日となりました。

暁の星幼稚園の皆さん、ほんとうにどうもありがとうございました。



WFC45 周年記念イベント

小倉 千代子

WFC45 周年記念イベントを8月7日に執り行い、多くの皆様にお越し頂きました。

イベントではDavid Rothauser 監督の「ヒバクシャー未来の生命へ」映画鑑賞、村上啓子様からのご紹介のアメリカ先住民、

ホピ族によるフープダンス、Jane Barnhardt のヒバクシャの肖像画を展示しました。

ホピ族フープダンスは和太鼓とのコラボレーションでエネルギッシュなパワー溢れるものでした。

そして映画鑑賞後は一般市民を巻き込む戦争からは何も生む事はないと新たにすべき意欲を持つ事を教わりました。

多くの人々からのご尽力でこのイベントを成功させる事ができ、皆様に心より感謝致します。

